
二人の間に潜む魔物

羽入 × 菊月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二人の間に潜む魔物

【NZコード】

N8187R

【作者名】

羽入×波月

【あらすじ】

藤樹 後は坂倉 美夜の事が好き。何度も告白しようとするがなかなか言えない。そんな中、美夜はとある病気で倒れる。そしてその病気は一人の間をなかなか近づけさせないのだ。

九月。残暑がまだ厳しい中、職業校であるこの高校では六割の三年生が就職を志望している。今はその人達が各先生達に面接練習のお願いをし、面接練習をしていた。

俺も三年生、進路は進学。音楽関係の仕事をしたい為、東京の専門学校を受けることにした。最初、親に大学行けとか言われたけど、どうしてもやりたい！と何度も何度も言つた結果、今では仕方なく了解してくれた。

突然だが、俺はこの高校生活の間、ずっと好きな人がいる。

その子の名は同級生の坂倉 美夜さん。^{みや}ロングヘアで大人しい。成績は優秀で、常に学年TOP3に入る。生徒会では副会長を務める。

そんな坂倉さんを俺は初めて会つた時、そう入学式から好きだつた。何度も何度も坂倉さんに告白しようと試みたが、なかなか言えなぃまま今日まで来てしまった。

坂倉さんは常に学年トップ。その平均点は90超え。100点満点なんか何十回も取つている。そんな坂倉さんの進路は京都の超有名大学経済学部。

先程坂倉さんは大人しいと言つたが、こう見えて結構何でも積極的にする人で、クラスでは隠れた人気者。俺はそういう所に惚れてしまつたのだ。

十月。就職する人達が次々と内定を貰う中、遂に進学者の試験は刻々と迫ってきた。俺らの高校で進学する人は殆どが公募制推薦。

何故なら職業校と進学校じゃ勉強量が全然違う。だから一般試験なんか受かりっこないのだ。だから俺らには公募制推薦しか大学は行けないので。俺は大学など行ける頭では無い為、専門学校。その試験もあと一週間となつた。

某日放課後、午後六時。俺は友達とゲームをしていた。

「よしつづかんだ！攻撃攻撃！」

「わかつてるつて」

「おい、誰か爆弾持つてきた？」

「いや」

「持つてこいよバカッ」

俺ら三人がやっているのはモンスターを狩る携帯ゲーム。今回のモンスターはかなり手強く、勝率は10%未満という激ムズ。そこで三人でやっているわけだが、なかなか倒せない。

「あと10分だつてよ」

画面に残り10分と表記された。

「おい、急ぐぞ！」

「わかつてる！つてかおまえこそ隙を見て攻撃せいや！」

「俺は…弱いから見てるよ」

「んなの知るか！」

そんな事を言つている間に俺のキャラは死んでしまつた。

「あー、死んじまつたじゃねえか

「つたく」

二人の会話を聞きながらもう一人は言つ。

で、結局…

「時間切れだあ」

俺は天井を見ながら言つ。

「こんだけやつて涎すら垂らさないとか強すぎだろ」

茶髪で瞳が水色のコイツはアメリカ人の父と日本人の母から生まれたハーフの志原 混大。分かりやすく言うとハーフバカって感じかな?」

「まあな。つか俺ら一人でやつたからな」

「ちよちよちよ待てえええええいつ!俺も参加したじゃん!一緒に

に闘つたじゃん!ねえ藤樹」

志原が俺に対して突っ込む。

「確かにこいつはほぼ参加していないな」

「藤樹いいい」

「あんま虧めるな藤樹。志原が泣いちまうぞ」

「オイ、清水目え。誰が泣いちまうだとお」

「ヤツベ、俺帰るわ。じゃあな藤樹」

「おう」

「こらつ、待たんか清水目ー!」

分かりやすく名前を付けるなら黒髪の爽やか高校生かな。名前は清水目 玲藍。まず最初に思つたのは名前覚えるのに時間がかかる事。苗字も名前も難しく、特に清水目なんか絶対読めない。本人も一発目で名前を読めた人はいないらしい。そんな清水目は清水目家第28代。お父さんは某電機メーカーの副社長。お母さんはファッショング雑誌の編集長。その為、彼の家は超大豪邸。東京ドームの半分の土地を持ち、別荘が世界に三件ある。更にコイツは超イケメン。前、東京に遊びに行つた時、色んな場所でスカウトされた経験を持つ。高校でも女子にモテモテ。男子から見たら羨ましい存在だ。清水目は荷物を背負つて教室を飛び出た。その後を志原が追う。

「つたくあいつ等は……」

あ、俺の名前を言つたのを忘れてたね。俺の名前は藤樹 後。ごくごく普通の高校生。自分であれだけ名前を付けるなら……一般人。

「そんじやあ、俺もそろそろ帰るか」

教室の電気を消し、校舎と校舎を繋ぐ渡り廊下を歩く。

外を見ると真っ暗。街灯で照らされている枝葉が揺れている。これは寒そうだ。

階段を降りて北校舎三階。すると一室だけ電気が点いていた。こんな時間まで点いているとすれば恐らく生徒会室だ。多分そろそろ体育祭が始まるからその準備だろう。生徒会室は前にも言ったけど、北校舎三階の端、俺らがいる教室は南校舎四階。この学校は主に教室は南校舎。生物室、音楽室そしてコンピューター室などがあるのは今いる北校舎だ。この校舎は出来て30年近く経つ。なんせトイレを見れば一発で昔を感じる。例えば男子トイレは小便した後、ボタンを押して流すのが普通かと思うが、この校舎にそんな物はない。便器の上にタンクがあり、そこから一斉にその階にある便器に水が流れるのだ。大便は流石に一個ずつ流すのが付いている。

そんな事を話している間に一階に到着。靴に履き替え、スリッパを自分のロッカーに入れる。

「さみい——」

玄関を開けると、外は予想以上に寒かった。

「駅まで行くのめんでえなあ」

手で反対側の腕を擦らしながら駅まで歩く。

駅に到着し、ホームの椅子に座る。

「早く電車来ないかなあ」

風が異常な程強い。凍え死にそうだ。

「あれ？」

ふと右を見ると、坂倉さんが立っていた。

坂倉さん…やっぱり生徒会の仕事をしてたんだな。

暫く見ていると坂倉さんも前の俺のように、反対側の腕を掴んでいた。すると坂倉さんもこっちを見た。

「あつ」

「ふ、藤樹君！？」

互いに目と目が合つた。

「坂倉さん。今日も生徒会の仕事？」

「う、うん」

「大変だね。こっちに来なよ、立つてると下から風が入つて寒いよ？」

「そ、そうだね」

坂倉さんは俺の隣に座る。今駅に居るのは俺と坂倉さんだけだ。

「さ、坂倉さん大変だよね。進学もあれでしょ？ 大学だつける？」

生徒会の仕事をしてて大丈夫なの？」

「…正直今、…に行けるか分からない。勉強したいんだけど、でも生徒会の方もほつとけないから…」

「頑張り屋だね。サボっちゃえば？」

「だ、ダメだよ。あたし副会長だよ。副会長がサボっちゃ…」

「やっぱ眞面目だね、坂倉さんは。でもたまには自分の事にも力入れた方がいいと思うよ。ま～こんなバカな俺が言う事でもないけどさ」

「……」

坂倉さんは下を向く。

「あーごめん。傷ついた？」

「ううん。心配してくれてありがとう」

「そういえば、今日何人で仕事をしたの？」

「三人…かな」

「三人！？ だつて役員で就職で内定貰つたやつとかいるでしょ？」

「それがなかなか皆集まってくれなくて。きっとなんか忙しいんだよ」

「そんなわけない。あいつら今頃遊んでるつて」

「でも…」

「最悪だよそいつら。俺で良かつたら手伝おつか？」

「いいよ。藤樹くんだつて進路で忙しいんでしょ？」

「ま、まあね。でも受かつたら手伝いに行くよ」「ありがとう。でもその頃には終わってるから」

「そ、そうなの！？」

「うん、殆ど今仕上げに入ってるから」

「そもそも何作つてんの？」

「体育祭のアーチ作製」

「そつか。もうすぐ体育祭だもんね。結構かかつたでしょ？」

「そんなかかつてないよ。えーと確か…一週間くらいだつたかな？」「それかかる！充分かかる！」

「そつかなあ？」

「そうだよ！」

その後も会話が続く。やっぱ好きな人と話すと楽しい。

「（メロディ）鷹江方面、電車が参ります。白線の内側までお下がりください」

「電車来たみたい。じゃああたしぬこいで」

「うん。また明日」

俺は坂倉さんと真逆の新田方面にったに到着し、ドアが開き、坂倉さんは入る。帰省ラッシュみたいで、多くの人が乗っていた。
プシュー

ドアが閉まり、電車は出発する。俺はその電車を見えなくなるまで見ていた。

翌日、SHR（朝の会）開始十秒前。

「ハツハツハツハツ…」

俺は階段を上がり、渡り廊下を歩く。
ガラガラガラ

キーンゴーンカーンゴーン

「ハアハアハア…なんとか間に合つたあ」

ドアに手を当て、呼吸を整える俺。

「間に合つたじやない！はよ席に着け！」

顔を上げると、老眼鏡かけた50代後半位の担任の江島先生が俺に注意した。

「はい」

俺は一番後ろの窓側の席に着く。

「礼」

当番の人人が言い、皆着席する。

「おまえ、たまには早く来いよ」

「るつせえ、朝早く起きれねえんだよ」

顔を机に着け、隣に座っている志原に小声で言う。

「それじゃあ今日の欠席者は…坂倉は風邪で休みだ珍しい…坂倉さんが休みなんて。

そんな事を思いながら荒い息を鎮める。

8

一時限目は数学。数学の今年来た25くらいの若い女の先生、桐林先生が何やらプリントを持って教室に入ってきた。

「それでは今日はテスト一週間前なので小テストを行います」

「え――――」

皆が同じ言葉を言う。

「え――じゃないの。ほら後ろに回して」

先生は一番前の人へプリントを配る。

俺の所にもプリントが配られた。表裏ビッシリと問題が書かれていた。

「これを解けば本番八割はいけます。終了十分前に解答用紙を配るからそれまで頑張って下さい。教科書とか見ても構わないから。それでは始めつ」

皆一斉に書き始める。その後、先生は教室を退出した。

十分後。ずっと問題を解いていた俺は辺りを見回す。

「うわあ～殆どの奴寝てるし」

一番後ろの席からはよく見える。三割くらいの奴が明らかに寝てる。しかも全員就職内定者。そして隣の志原も。志原は整体師関係の専門学校を既に合格…というか書類提出で受かったんだけどね。

「決まつたからって寝んのかよお」

決まってない俺にとっちゃあ何故かこいつこいつ小テストでも寝てはいられない。一問一問正確に解していく。

「終わつたあ」

解答が配られる四分前に全ての問題を解け終えた。

時間になり、先生が解答を配る。教科書等を見たからもあって一問だけ不正解だった。いつも平均点な俺にとっては上出来だ。まつ、教科書見たから高いに決まってるか。

「コイツまだ寝てやがる」

にしても隣の志原は夢の世界へ入ったようだ。本当に呑気な奴だコイツは。

一時限目が終わり、二時限目は体育。男子が徐々に出る中、志原はまだ寝ていた。これは流石に起こさないと。

「おい、志原。起きろ！」

「ムニヤムニヤ…パフェが食べたい…」

「パフェ！？駄目だこりや。」

「どうしたの？」

話しかけてきたのはショートカットでスポーツ万能の巨乳なクラスマートの真留芽吹^{まどめ めふき}が言う。元女子卓球部部長で全国大会に出場

した事がある。

「ああ真留さん。「イイツがわあ、見ての通り、爆睡しちゃつてさ…」「こんなクソゲーほつとけば?」

「クソゲー……ね」

クソゲーとは勿論志原の事。理由は毎日のようにHロゲーだの18禁ゲームを教室でやっているからだ。何せ休みの日は睡眠時間を削つてまでやるといつある意味気持ち悪い奴。その事を俺ら男子が広げた結果、殆どの女子が志原の事を「クソゲー」と陰で呼ぶようになった。

「そうか?じゃあそつするわ。寝てる「イイツが悪いんだし」

「そつそつ。まあ着替えてる最中に起きたらぶつ殺すけどね」

真留の田付きが肉食動物が獲物を捕らえるよつた田に豹変した。うわあ田が怖え

俺はわざと教室を出て、男子の着替え室である武道場へと向かつた。

「ムニヤムニヤ…ン?」

志原が田を覚ました。

「テスト終わつたあ～つてあれ?」

志原の田の先には女子が着替えてる最中だった。

「「「キヤアアアアアアアア…!…!…!…」」」

女子の声が志原の鼓膜にガンガン伝わる。

「クソゲー、何してのお?」

既に運動着に着替えた真留が指をボキボキ鳴らしながら言ひ。

「えつ、ななな何?どうなつてるの!…?」

「このお…ド変態があああああ…!…!…

「バチン

真留の掌が志原の頬にクリーンヒット。その威力は卓球で鍛えられた腕とあって、男子にビンタされるより痛い…筈。

「いつてえーじゃねえか真留ー！」

「五月蠅いクソゲー、さつさと出て行けえええええー！！！」

志原は運動着を持つて教室を急いで出た。

「おっ、来たかエロ男」

あるクラスメートが言つ。

「誰がエロ男だ！」

「頬まつ赤じやねえか」

「つるつせえやい！」

右頬に掌の跡がくつきりと残っている。きっと真留がやったんだ
な。

「おまえ嘘寝でもしてたんじゃねえか？」

「しどらんわ！ もろ爆睡してたんだよ！」

「分かつた分かつた。おまえの言い訳が充分だから

「言い訳じやなあああい！」

叫びながら志原は運動着に着替えた俺の所に来た。

「藤樹！ おまえ隣だろ？ 何で起こしてくれなかつたんだよ？」

「起こそうとしたけど、おまえ爆睡してたから…」

「そこはビンタとかなんかするでしょ…」

「暴力は駄目かなあつて」

「そんなの暴力に入らないって！」

「グズグズ言うな。あと一分で始めるぞ」

「ちょ、待つてや」

「はいはい」

俺はダッショウした。

「おい、藤樹！ クソソー

志原も急いで着替えた。勿論遅刻となつたけどね。

昼休み。

「今日は散々だ」

志原がぐつたりと寝る。

「仕方ないだろ。寝てたおまえが悪いんだから」

俺はバッグから弁当箱を取り出し、蓋を開ける。

「今日も相変わらず冷凍食品で揃つてんな~」

俺は独り言をブツブツ言つ。

「つーかあいつが悪いんだよ真留。あんな思いつきりビンタしなくたつていいじゃねえか。見てよーまだ若干あいつの跡が残つてんだぜ」

確かに右頬にくつきりといつほど残つている。流石加減無しの真留だな。

「いいから飯食えよ。じゃねえと新作ゲームできなくなるんじゃねえのか?」

志原は急に起き上がつた。

「今日は新作ギャルゲーをやるために来たんだつた!」

「おいおい…学校を何だと思つてんだコイツ。

「藤樹もパッケージ見るか?これチョー萌えるぜ」

志原からパッケージを渡された。うん、ギャルゲー特有の絵だ。「ま、おまえがやりそうなゲームだな」

俺はパッケージを返す。

「これチョー萌える筈だぜ?シリーズ最高傑作だつてネットで騒動になつてたし!」

「分かった分かった。いいから飯食うぞ」

「しかもさ今回付録がパナインだよ。ヒロとか限定グッズ…くうヤツベヨ」

志原のテンションが徐々に上がりしていく。こつなると処理が面倒になつてくる。だからこついう時は無視が一番。

「まず、麗奈ちゃんがあーして、このはちやんのあれがあつて、そしてなんてつたつて珠里ちゃんの…」

ああーうつぜえコイツ。ガチで殺したいぐらいだ。

「藤樹

「おう 清水目^{すみのめ}」

丁度良い所で清水目が来た。

「どうした?」「

「おまえつてやつぱ凄いよな

「ああ、志原の事だろ?」

「こんなクズの隣でよく…」

「まあ仕方ないさ。たまたま場所が悪かつただけさ。今は窓側だから外の景色を見てなんとかなるけど、もし廊下側だつたら俺は死ぬな」

「確かに俺も死ぬな。つかそつ言つ事なんてどうでもいい。藤樹、

先生が呼んでたぞ」

「先生?」

「ああ、なんか重大なお知らせだとよ

「重大な?」

俺は席を立ち、階段を降り、一階にある職員室へ向かった。

「失礼します」

「おう 藤樹、ちょっと来てくれ」

一番奥の端にいる担任のもとへ行く。

「突然ですまないが、放課後にノートを見せてくれないか。おまえいつも真面目にノート取つてるだろ?」

「真面目かどうか分かんないんですけど。俺ので良ければ」

「おまえでの良い。放課後、俺の机の上に置いといってくれ

「分かりました。失礼しました」

「先生確か環境だったよな。ロッカーにあるかな?」

そんな事を思いながら歩いていく。

「あ、あつた」

ロッカーにあつた事を確認し、教室に入る。

「おっ、どうだつた？」

席に座つている清水田が喋る。

「ノート見させてくれだつてさ」

「そつか。おまえ真面目だからなあ

「真面目じゃねえよ」

歩きながら、俺は自分の席に向かう。

「おっ、藤樹。今やつてんだけど、マジヤバイ」

志原は俺が座つた瞬間携帯ゲームを置き、再び俺にゲームのことを喋り始めた。

さて、飯食うかな。

隣が喋つているのを耳から反対の耳へと通過させながら俺は飯を食つ。

放課後。ノートを先生の机に置き、今日ほゲームせずに早めに帰ることにした。

「（メロディー）新田方面、電車が参ります。白線の内側までお下がりください」

こんな早く乗るの、部活入る前以来かも。

電車に乗ると、いつも乗る18時に比べ人はあまりいなかつた。

その頃坂倉家。

一階の自分の部屋で美夜は寝ていた。薄いピンクの壁の周りには色んなぬいぐるみが置いてあり、本棚には少女漫画やCDやアルバ

ム。壁には帽子などが飾つてあつた。

ピピ、ピピ、ピピ

体温計を取り出すと、三十八度一分。少し熱があるくらいだ。

「ちょっと水でも…」

家には誰もいため、一階のキッチンまで行かなければならな

い。

「うひ

起き上がり、数歩歩くと頭痛が起き、手を頭にあてる。そして時々めまいがする。何だろう…全然前がハツキリと見えない。壁に手を当てながらゆっくりと歩き、階段も一段一段ゆっくり降りる。

いつもなら部屋を出てキッチンまでは十数秒で行ける筈が今回は二分以上かかるつてしまつた。なんとかキッチンに到着し、コップに水を入れる。

ゴクゴク

「ハア、ハア、ハア」

一杯ほど飲み、再び部屋に戻る。また階段を一段一段ゆっくり登る。足に重りを付けているようで重く感じる。

「ふう~

なんとかベッドに到着し、布団に入る。

翌日も、その次の日も坂倉さんは欠席。

「大丈夫かなあ

授業中、俺は携帯を開き、先生にばれないように坂倉さんにメールを送つた。いつメアドをゲットしたかつていうと、高校一年生の時、クラスの文化祭係になつた時に連絡を取り合つたという事でゲットしました。

内容は「最近学校来ないけど大丈夫?」

数十分後。

ブー、ブー、ブー

制服のポケットに入れてあつた携帯電話のバイブが振動する。坂倉さんからだ。

「大丈夫。明日辺りには行けそつだから。心配してくれてありがとう」

「そつか。俺は少し安心した。

「あまり無理はしないでね。じゃあ明日」

俺は送信ボタンを押す。

携帯をポケットにしまい、俺は急いでノートを執った。

その夜、坂倉家。

ガチャ

「美夜、具合はどうだ？」

父が美夜の部屋に入る。

「あ、お父さん。大丈夫だよ。薬を飲んだおかげで今は平気だよ」ベッドに入りながら答える。

「そうか。もうじきご飯だから降りてきなさい」

「うん」

父が去った後、美夜の起き上がる。

「うつ、まだ…」

またしても激しい頭痛が襲う。しかし美夜はその内治るだろうと思っていた。しかし今回は何故か頭痛が長時間続き、一歩歩くのに数秒もかかるてしまう程美夜に頭痛が襲う、時折しゃがんでしまう時もありながらなんとか階段を降り、リビングに入ったその時。

「あつ」

急に足の感覚が無くなり、美夜は倒れかけ始める。

バタン

視界が真っ暗になり、美夜は倒れた。

その様子を数メートル先で父母が見ていた。

「美夜ッ！美夜ッ！」

父が駆けつける。

「おい、美夜！目を覚ませ！美夜」

父の声に美夜は反応しない。

「救急車を呼びましょ」

母は電話機で救急車を呼ぶ。

「もしもし、娘が倒れてるんです！今すぐ来て下さい」

ピー ポー ピー ポー

數十分後。救急車は坂倉家に到着した。

三十分後、病院。

「緊急患者です。退いてください」

通路に美夜の乗せたストレッチャーは手術室へ向かう。手術室と書かれた看板が赤く光る。

「美夜、美夜！」

母は涙を流しながら、手術室前で止まる。父は何も言葉にすることは無かつた。

何十時間後。

手術室と書かれた看板の赤い光が消えた。

ガシャン

扉が開き、ストレッチャーに乗った美夜は一人の前を通り過ぎた。

その後に医師が来て、二人の前で止まった。

「先生、美夜は… 美夜は大丈夫なんですか」

喋った母と黙っていた父は立つ。

「お母様、お父様。美夜さんは

「も膜下出血です」

「く、くも膜下出血！？」

父は思わず大きい声を出す。

「そんな、美夜が…」

母は驚く。

「はい。それもかなり悪化しています」

「そんな…」

母はその場で座ってしまった。

くも膜下出血……脳の血管のトラブルが原因で起きる病気で、脳卒中の内で死亡率が高い病気。もともと脳動脈に何らかの弱い部分があり、通常の血圧そのものが血管壁を破るきっかけになる。特に脳動脈が一手に分かれているような場所で起こりやすい。三分の一は社会復帰、三分の一は回復するが重い後遺症、そして三分の一は死亡。

「一応応急処置はしましたが、別の場所で起こる可能性があるので一ヶ月は様子を見ましょう。尚今回で社会復帰は極めて難しく、重い後遺症が残るか、最悪の場合死も考えられます。しかし我々は必ず美夜さんを今まで通りの生活を送れるよう努力いたします。なのでご両親も美夜さんが助かるよう祈つといてください」

医師はそう言つた後、二人の間を通り過ぎた。

翌日、美夜さんは学校に来なかつた。

「おかしい。確かに今日行くって行つてたのに
藤樹は心配になつた。

放課後、坂倉さんにメールしようと試みた。しかし、無闇にメー
ルするのも良くない。

「坂倉さんが戻るまで待つか」

携帯を閉じ、一人帰宅していった。

一方病院。

「ん……ん~」

美夜は目を覚ました。辺りは真っ暗だつた。

「ここは…」

暫くあまり景色は見えなかつたが時間が経つごとに見えるよつこ
なり僅かながら左右首を振つた。

ガラガラガラ

美夜の両親が入つてきた。

「美夜！」

美夜が目覚めた事に気付いた両親は美夜のところに駆けつける。

「美夜！大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ…お母さん」

美夜は小声で応える。

「よかつたあ」

母は涙を流す。

「美夜……よかつたなあ」

続けて父も涙を流す。

「なにさ一人そろつて泣いて」

聞こえるか聞こえないかのくらいの声で言つ。

「あなた、くも膜下出血で倒れたのよ」

「くも膜下…出血？」

「やうよ。お医者さんからあなたは深刻だつて言われたからお母さんどうじようかと…」

「母さん。あまり美夜に負担かけさせむよな事を言つた」

「あ…ごめんなさい。だつて…生きてただけでも嬉しかつたんですもの」

「おいおい、泣くなつて」

と言ひながらも父も美夜の手を握りしめる。

「心配かけて…『ごめんね』」

美夜の目に涙が零れる。

一ヶ月後。

「また遅刻やあ———」

相変わらずギリギリで登校する藤樹。

ガラガラガラ

「ハア、ハア、ハア…セーラーフ」

キーンコーンカーンコーン

先生はまだ来ていなかつたので安心して席に戻る。

「ハアハアハアハア」

俺はいつも通り座り、机に額を付ける。

「藤樹くん」

「はい…何ですか？」

聞こえる声に顔を上げる。

「さ、坂倉さん！」

田の前には坂倉さんが立つていた。

「おはよ、藤樹くん」

「おおお、おはよう

動搖しまくる俺。

「ちょっと用事あるから放課後屋上に来てくれない？それじゃあ坂倉さんは俺に耳打ちでそう言い、自分の席に戻つていった。つか坂倉さん学校に来てたんだ……」

「おい、藤樹。坂倉と何話してたんだ？おいーおいー。俺は呆然としている。志原は藤樹の体を揺する。

「んあ？」

やつと我に帰つた藤樹。

「んあ？じゃねえよ。坂倉と何話してたんだ？」

「あ…ああ。仕事の依頼だよ」

「おまえに仕事？じゃなくて告白だろ？」

「ギクツ！こんな俺にあるわけないだろ？」

「そうかあ？目が泳いでるぞ」

「バカ野郎！ねえもんはねえよ」

「はいはい」

志原はニヤニヤしながら席に戻る。

あの話の内容は何なんだろう？

結局その事で一日中勉強に集中できなかつた。

「よし、これで終わりだ」

「起立、礼」

当番が号令をかけ、放課後になつた。
すると同時に。

ブーブーブー

携帯が振動する。坂倉さんだつた。

「今日の午後5時に屋上で」

ヤバイ…これは告白じゃねえか！絶対にそう！絶対にそうだ！
心拍数が上昇し始め、顔が赤くなつていぐ。

「藤樹、通信対戦しようぜ」

志原と清水目が来た。

「お、おっ」

「何おまえトマトの皮に赤くなつてんだ?」「

「ちょっと熱が…でも大丈夫だ。わわ、やるうぜ」

「おまえ何か今日変だぞ。授業中ぼけーっとしてたし

「大丈夫だつて。早くやるうぜ」

「だから志原、おまえも攻撃しろつて」

「俺つちは弱い。だから採掘じやい!」

「せこいやろうが」

清水目が思わず言葉を零す。

「清水目、あいつは一生独りでつまらないゲーム生活を送るだけだ。
俺らだけでもやつちまうぜ」

「つて言つてもな藤樹。コイツ前より強くないか?」

「そうか?これ志原のやつだからな。志原、これレベル何?」

「6」

「6!?」「

驚く俺と清水目。

「おまえ何6つて! おまえこいつそんなに……」

「裏ワザ」

志原がピースサインをする。

「ふざけんじやねえよ!」

「そうだ! それで独りだけ採掘とか…」

「一人は段々怒りへと変わっていく。」

「まあまあ二人共、ゲームに集中集中。あ! ルドウーラ石じやん。

超レアGET!!!!」

「志原!!!」

一人はゲームを一時中断し、立ち上がった。

「おい、藤樹清水目……」

「清水目、これからやる事分かつてある？」

「勿論さ藤樹」

「な、何するんですか？」

「ちよいと皿を譲りてな？」

ま 待つて……俺が何にもしてないよ

「大人しくして置よお」

志原の声が俺以外のない教室内に響いた。

卷之三

五分後。

「シナリオ」

「これで元壁。さて再びゲームやろうぜ清水田」

E
I
-

志原は口をガムテープで止められ、更に両手両足を紐やガムテープで縛められ、身動きが取れなくなつた。

「ンンン！（助けて！）」

「やあて、今處に何する？」

「いーとシガニヒヘリモノホノ」

卷之三

（無視しないで）——」
結局三十分間。志原はその状態が続いた。

卷之三

一段落し、時計を見ると午後4時58分だった。

「ちょっと俺トイレ行ってくるわ」

16

実際はトイレに行くわけでもなく、俺は渡り廊下を走り、階段を

上がっていく。屋上に繋がる階段を登りきり、深呼吸をし、扉を開ける。

ガチャ

「うわっ、寒っ」

夕日が綺麗だが、そんな事より風が寒い。この高校は都会にあるため、敷地はそんなに無い。そのため屋上にプールがある。

「坂倉さんいるのかなあ？」

プール周辺を歩いていると、端っこに誰かがいる。

「藤樹くん？」

坂倉さんの声が聞こえる。きっと坂倉さんだ。

「坂倉さん。何？こんなところに呼んで」

「実は…藤樹くんに聞きたい事があるんだ…」

坂倉さんはその後、なかなかその先の言葉が出ない。

「ふ、藤樹くんってあたしの事！」

坂倉さんは急に大きな声を出す。やつぱりこれって…これって…

告白！？俺の鼓動が最高潮になる。

そんな事を考えていると。

バタン

「え？」

妄想から現実に戻ると坂倉さんが急に倒れた。

「坂倉さん！坂倉さん！！」

俺は近寄り、坂倉さんの意識を確認する。

「意識がない。急いで保健室に連れかかなきや」

俺は坂倉さんを背負つて、保健室に連れて行く。

「先生！」

「どうしたの？」

保健の綿内先生が振り向く。

「先生、坂倉さんが倒れただんです」

「ちょっと見せて」

坂倉さんをベッドに寝かせ、先生は聴診器で確認する。

「心臓が…動いてない」

「心臓が！？」

「君、今すぐ携帯で救急車を呼んで！」

「は、はい！」

俺は携帯で電話する。先生は人工呼吸を行つ。

数十分後。

ピーポーピーポー

「何だ？」

「おい！ 救急車だ」

「誰か倒れたのか？」

皆窓から保健室を見る。勿論志原や清水目も。

「誰が倒れたんだろうな」

「分かんねえ。 そういうや藤樹は？」

「まさかあいつじゃ…」

「そんなわけないだろ」「…」

「おい、誰か運ばれるぞ」

保健室から坂倉が運ばれる。

「坂倉じやん！ あいつ今日登校したばっかじや…」

「やっぱ登校しちゃいけなかつたんだよ」

二人で話し合っている間に藤樹も救急車に入る。そんな中藤樹は…

「坂倉さん！ 坂倉さん！」

俺は坂倉さんに声をかける。

「君は少し退いていいさい。後は私たちに任せなさい」

俺は救急車の端っこでただ坂倉さんを見ることしか出来なかつた。そして俺の頭に最悪の事態が過ぎり始める。

後編（前書き）

だいぶ遅れて申し訳ないです。後編です。

「道を開けてくれーーー」「ストレッチャーで運ばれている美夜は手術室に入れられた。手術室のランプが赤く光る。

「坂倉さん…」

俺は座つて両指を交差して握り、意識が戻る事を祈るしかなかつた。

廊下から医師だろうか。白衣とマスクを付けた人が藤樹に近づき、目の前で止まる。

「君だね。発見者は」

「はい、そうですけど…」

「患者は現在凄い悪化している。患者の病知ってるか?」

「はい、くも膜下出血…ですか?」

「そうだ。患者は一ヶ月前にもここにくも膜下出血で緊急搬送されたんだよ。その時はかなり悪化してたよ。もう少しで死だつたからね」

「えつ…死…ですか?」

突然の言葉に驚く。

「そう。その時は私が担当して、なんとか死まではいかなかつたよ。でも重い後遺症が残るつて思つたんだ。でもその事は…両親には言えなかつた」

医師は少し間を置く。

「しかし患者は凄かつた。後遺症どころか普段の生活に戻れるくらいの猛スピードで回復していった。正直私も驚いたよ。あんだけ重症でここまで回復するとは思わなかつたからね。そして一週間前に退院した。あの時は正直心配だった。けど報告が無かつたから安心した。しかし今日患者は再び入院。やっぱりそつ簡単にはいかなかつたみたいだ」

医師は床に座りこむ。

「すいません。今回は何故坂倉さんの手術をしなかったんですか？」
「一度助けてた…」

「助けてなんかいなさい。助けるといつのは治つてから一生一度と同じ病気を患わないことをいつのぞ。けど今回再び入院。私は助けられなかつたのさ。だから今回は違う医師がやつているんだ」

医師の言葉に応えることが出来ない藤樹。

ウイーン

自動ドアから坂倉さんの両親が駆けつける。

「先生！美夜は…美夜は！」

母は医師にいつ。すると医師は立ち上がつた。

「今手術中です」

「そんなの分かつてゐるわよ。今回はどうなんですかー？」

「今日は別の場所で破裂したみたいですね」

「そ…そんな」

母は座り込む。

「先生、美夜は助かるんですねー!?」

父がいつ。

「わかりません。今回破裂した場所は前回の破裂よりもかなり酷くて…助かるかどうか…」

「あなたそれでも医者ですか！」

坂倉の父は医師の服を掴む。

「お、落ち着いて下下さいお父様。今は意識が戻る事を祈るべきなのはありませんか？」

「クツ…」

坂倉の父は服を離す。

「大丈夫です。私たちを信じてください。そうすればきっと神様が助けてくれます」

坂倉の父は両手をギュッと握り、顔を下に向けた。俺はそれをただ見ることしか出来なかつた。

十時間後、午前二時。

眠気が襲う中、俺と反対側にいる坂倉さんの両親は座つて待っていた。

「坂倉さん大丈夫かなあ～」
脳裏にそう思つていると。

「

プシュー

手術室の扉が開いた。開ぐと同時に全員立ち上がる。

中から医師が出てくる。

「手術は無事成功いたしました。しかし…」

「何ですか？」

坂倉の母が心配しながら言つ。

「美夜さんは……重い後遺症が残る可能性が極めて高いです
「後遺症つて…例えば」

坂倉の父が尋ねる。

「一番高いのは正常圧水頭症という病気です。これは出血後一ヶ月位に起こり、脳室という脳内にある液体の循環する部屋があるので、その中に液体が貯まり、脳室が拡大してしまい、精神機能障害や歩行障害が進行する恐れがある病気です。しかし後遺症よりもまだ死という可能性も考えられます。何せ二ヶ所目なので、更にまた別の場所でも起これば死という可能性もございます」

医師は解かりやすく説明した。

「死ですか？」

しかし坂倉の父は後遺症よりも死の方にしか頭に残つていなかつた。まだ十八歳の娘が死か生の選択肢の中にいるのだから…

「はい、なのでまた一ヶ月間様子を見て、後遺症が無ければ一週間自宅での生活を行い、そして最終検査で問題無ければ登校許可を出します」

「そうですか」

坂倉の父に「元気は無かった。俺はその様子を見て口を開く。

「諦めちゃ駄目です！元気出してください。坂倉さんだってまだ生きようと頑張っているんです。お父さんお母さん達がへこんでどうするんですか！まだ生きる希望は残つてゐんです。坂倉さんの奮闘を無駄にしてどうするんですか。ちゃんと応えるじゃないんですか？」

俺は精一杯今言える事を言つた。すると坂倉の母が涙を拭きながら立ち上がる。

「そうね。あなたの言つ通り。ここに泣いてたら折角頑張っている美夜が可哀相だわ。ありがとね」

続けて坂倉の父も口を開く。

「そうだな。おまえの言つ通りだ。ありがと」

「いえ、僕はただ坂倉さんがまた元氣に来て欲しいだけですから」

俺の顔は少し笑顔になつた。

「そうです。君の言つ通り。一日でも早く回復する事を我々は祈りましよう。今日はもう遅いので」帰宅ください

もう一人の医師の言つ通り、俺と坂倉さんの両親は病院を出た。

外は真っ暗で、風が冷たく吹いていた。

「君、名前は何て言つんだ？」

坂倉の父が言う。

「藤樹 後と言います」

「後くんか。家まで送らうが」

「いいんですか？」

「ああ構わないよ」

「すみません。お願ひします」

俺は坂倉さん家の車に乗つた。

「いいです」

俺の家の前で車は止まつた。まだ灯りが点いている。

「すみません。ありがとうございました」

車のドアを閉め、車は去つていつた。

「きっと怒られるだろうなあ」

家の方を見て、俺は思つ。

ガチャ

「ただいま」

「後！あんた何時まで病院にいたの！」

母は玄関にいた。

「知つてたの？」

「先生から電話で知つたわよ。それで、坂倉さんは大丈夫なの？」

「ああなんとかね。でもまだ危ないかもね」

「そう…あなた明日学校なんだから早く寝なさい

なんだ…俺の事はあまり心配してないのね。

そんな事を思いながら俺は二階へと上がり、布団の中に入つて寝る。

数日後の放課後。面接試験二日前。俺は職員室で先生と練習していた。

「どうして我が校を受験しようとしたのですか？」

先生は紙を見ながら言つ。紙には俺が書いた質問が書いてある。

「はい、私は小学生の時から音楽が好きです。私はボーカリストになりたくて、貴校は特にボーカルに力を入れてるという事で、私もボーカリストになつて人々に感動を与えるような人になりたいのでここを志望しました」

「ううん。この学校はボーカルに力を入れてゐるのか？」

「はい、インターネットやパンフレットに書いてありました」

「そうか。じゃあ好きなボーカリストを教えて下さい」

「はい、私はこの学校第24期生のポルノグラウンドの外賀さんが

とが

好きです。外賀さんの歌詞には毎回感動を受け、8枚目のシングル『風のように』ではなかなか告れない男が、風のようにさらっと近づき、彼女に告白したいという恋愛物語を書いた歌詞で、私はその歌詞に感動しました。その他も感銘受ける曲ばかりなので私は外賀さんが好きです」

その後も質疑応答が続き、担任に一応OKの許可がおりた。

そして翌日金曜日。俺は授業を半日受け、午後は荷物を持って、高速バスで東京へ行つた。

夜、宿泊予約しておいたビジネスホテルに行き、カードキーを貰う。エレベーターで上がり、カードキーを差しこむと鍵は解除され、部屋に入る。長い廊下を歩くと、ベッドとテレビが置いてある10帖程の部屋だつた。もう一度廊下を歩くとユニットバスへと入るドアがあり、反対側は洗面台が置いてあつた。

「いよいよ明日か」

ベッドに仰向けになりながら言つ。

「坂倉さんにメールでもしてみようかな？」

ペペペペ

俺は携帯を開き、坂倉さんに送るメール文を作成する。流石に返信はないと思うけど取りあえず。

「よし、これでいいか」

力チャ

送信ボタンを押して携帯を閉じ、布団の中に入った。因みに内容は「今東京にいます。明日は面接試験です。かかるよう頑張ります！」

面接当日。会場である専門学校に着く。6階建てのビルで、結構
真新しい。

中に入るとホテルのロビーみたいに広い部屋で、その中には多く
の人気が集っていた。同じ年もいれば、明らか年上もいる。まあ専門
学校なんてこんなもんか…。

そう思いながら、受付に行く。

「面接カードをお見せください」

俺はカバンから面接カードを取り出す。

「A - 062……藤樹さんですね」

「はい」

「試験会場は4階のB室です。あちらのエレベーターでお上がりく
ださい」

「分かりました」

俺は面接カードをしまい、奥のエレベーターの列に並ぶ。暫くし
て入るが、ぎゅうぎゅう詰めで一番奥まで押された。4階に到着し、
強引に退かしながら降りる。廊下を歩くと一人の先生らしき人が入
り口で立っていた。

「こちらが控え室になります。同じ番号が書いてある席にお座り下
さい」

中に入ると多くの人が座っていた。一つの長テーブルに二人座っ
ている。全体を見るとおよそ25人くらいはいる。

「A - 062、A - 062…あつた」

長テーブルが3つ横に。縦に10個置いてある。俺は真ん中の長
テーブルの6番目の通路側にA - 062を書いてある紙を見つけ、
荷物を置いて座る。隣はちょび髭を生やした人が座っていた。
暫く待機していると、

「それでは皆様…」

顔を前に向けると、若い先生が教壇の上に立っていた。

「本日は我が専門学校へ来ていただき有難うございます。さて、早く速ですが面接方法を説明します。面接時間は5分間で、一対一で行います。番号が呼ばれましたら、必ず荷物を持って退出して下さい。試験終了後は速やかに控え室に戻る事無くエレベーター又階段がある方へ向かって下さい。ただし、トイレの場合は私たちに言ってから退出して下さい。荷物は背負つたまま面接室へお入り下さい。では10分後から面接を始めます。順番はこのような形で行います」すると先生はホワイトボードに紙を貼り出した。俺は三つの部屋の真ん中の一番部屋で8番目だった。

面接が始まり、次々と呼ばれ、人が控え室から消えていく。
そして、

「次、B - 061、A - 062、U - 063番の方」
受験番号が呼ばれ、俺はカバンを持って席を立つ。

「B - 061番の松田さんは1番のお部屋、A - 062番の藤樹さんは2番のお部屋、U - 063番の柳平さんは3番のお部屋になります」

廊下を歩いていると、ドアの前には番号と椅子が置いてあった。俺は2番と書いてある紙のドアの近くの椅子に座った。

緊張するう。

近づいていくにつれ、心臓がバツクバツになる。

ガラガラ

「失礼しました」

前の人が出てきた。

いよいよ来たか。

緊張がMAXになりながらも俺は席を立ち、ドアの前に止まる。

スウ～、ハア～

一回深呼吸をした。

「ン」
「どうぞ」

向こうで女人の声が聞こえた。

ガラガラ

「失礼します」

一礼し、ドアを閉める。目の前には女人の人とおじさんが座つている。

「受験番号A-062、藤樹後（うしづ）です。よろしくお願ひします」

「どうぞ、お座りください」

「失礼します」

俺は椅子に座る。やべえ心臓が張り裂けそうだ。

「それでは面接を始めます佐々原君。あまり緊張しなくていいからね。じゃあまずどうして我が校を志望なさったのかしら」

「はい、私は小学生の時から音楽が好きです。私は色んなアーティストさんを見て、貴校は特にボーカルに入れてるという事で、私もボーカリストになつて人々に感動を伝えるようにな人になりたいのでここを志望しました」

「なるほどねえ、じゃあここを卒業した有名なボーカリストが我校には多々いるの。三人程あげてくれないかしら」

「はい、ポルノグラウンドの外賀さん（とか）、オレンジ魂の井上さん、元SKY BLUEの福内さん、渡邊さんです」

「SKY BLUEの福内さん、渡邊さん…懐かしいわね。彼らは確か第5期生よね。田ノ上さん？」

「そうですね。君良く知ってるね」

「はい。大好きですので」

SKY BLUE。ボーカルの福内さん、渡邊さん、ギターの池間さん、ベースの新富さん、ドラムの島原さんによる国民的バンド。1983年デビューでこれまでに多くのヒットソングを歌つてきた。しかしグループは2008年解散した。

「そうですか。じゃあ君はボーカルを目指すと」

「はい」

「目指す人は誰ですか？」

「多くいますが、ポルノグラウンドの外賀さんみたいに歌詞と歌声で皆さんを感動させたいと思います」

「分かりました。ちょうど時間ですね。これで終わります」

「ありがとうございました」

俺は席を立ち、ドアをスライドさせ、

「失礼しました」

と言い、ドアを両手でゆっくり閉めた。

「ハア～、やつと終わつた…」

そんなことを思いながらエレベーターへと歩く。

外へと出て、俺は深呼吸した。

「なんかあつという間だったなあ。結果を待つしかないか

俺は新宿のバスター・ミナルへ歩いた。

一日後。校舎内

「ういーす」

「おはー藤樹」

教室に入ると志原が片腕を挙げて挨拶をする。志原は片耳にイヤホン、そしてゲームを片手に持っている。まあどうせ例のアレだろう…

「それ何のゲーム？」

分かりきった感じの声で問う。

「これ？昨日発売したゲームだぜ。藤木もやつてみつか？」
画面を見ると、男と女の会話シーンが流れていった。

ハハハ…（やつぱりか…）

「俺いいわ」

俺は遠慮気味に言いつ。

「んな事言つなって、ほらイヤホン着けて聞いてみ?・マジやべえか
ら」

イヤホン渡され、仕方なく付ける。場面は屋上。

(女) 「ねえ、あなたは私のこと…『いつ思つてゐるのよ
照れながら女は言つ。」

(主人公) 「ど、どうって言われてもな…」

主人公らしき男は手を頭の後ろにあてながら言つ。

(女) 「…答えて欲しいの。あたし…」

(主人公) 「…」

(女) 「…あたし…」

女は顔を下に向ける。

ドクドクドク

向けたと同時に女の心拍数の音が聞こえる。

(女) 「あなたのことが…」

(主人公) 「…」

(女) 「す…す…」

ブチッ

俺はイヤホンを外した。

「どうした佐々原?」

「おまえ、よくこんなゲームをしてられるな?..」

「そつ?こんな普通だけど…」

「…」

俺は志原の言葉に愕然とした。

「普通…か。じゃあ俺荷物置いてくわ」

おまえなんか一生おかされてろ、この一次元野郎!
俺は心中でそう叫んだ。

夜、手術を終えた美夜は酸素マスクを付けて寝ていた。

そして別部屋で、両親は医師から宣告される。

「坂倉さん、誠に申し訳ないのですが美夜さんの病状が急に悪化しました。今私たちは出来る限りの事をしました。しかし…」

医師は突然話を止める。そしてなかなかその後を言わない。

「大丈夫です。私たちは覚悟しますので」

父親がそう言うと、医師は口を開く。

「お父様お母様、これから大事な事を言つので心して聞いてください。美夜さんは…」

医師は唾を飲み込んだ。そして、

「…余命…一週間です」

医師はそう告げた。

「に、一週間！？」

坂倉の母親は口を震わせながら叫ぶ。父も目を全開させる。

「はい」

「そんな…そんな…」

思わず言葉に母親は両手を顔に当て、泣きだした。父親も思わず涙を流す。

「他に…治療法はないんですか！」

父は顔を上げて叫ぶ。

「私どもや世界の医師達とインターネットを通じて聞いたんですか。

無理だと…」

「そんな…」

父は愕然とする。

翌朝、美夜はゆっくりと目を開ける。
目を開けると、両親の姿が映っていた。

「美夜、起きたか」

「急にどうしたの…あれ?」

「美夜は掠れ声で言つ。そして自分が酸素マスクをしている事に気が付く。

「美夜、突然ですまないんだがおまえに伝えなければならない事が
ある」

「何?」

「心して聞け。おまえは

「まさか、余命?」

「あ…」

「美夜のお驚くべき言葉に口が開いたまま止まる父親。

「あなた…」

母親は父親に言つ。

「やつぱりそうなんだ…お父さん…あと何ヶ月なの?大丈夫…あた
し、覚悟してるから」

「そうか。おまえは…」

父親はその続きの言葉が出てこない。それを見た母親は口を開く。

「美夜、あなたは余命一週間よ」

「おまえ…」

「…そう。あたし、余命一週間なんだ」

美夜は笑顔で応えた。

「大丈夫だよ。もう大体こういつ事言われるつて分かつてたから」

「そ、そ…じゃあお母さん達、仕事に行くね」

「うん、行つてらっしゃい」

両親は部屋を出た。

「あと…一週間なんだ」

美夜の目から涙が零れる。

数日後、藤木はと言つと…

「ハアハアハア」

朝からチャリを漕いでいた。

「坂倉さんに…坂倉さんに伝えなきゃ」

俺は病院へと向かつた。

「着いた」

自転車を止め、俺は息が切れながらも病院へ入つていった。同時に坂倉さんの両親も病院を出て行つた。すれちがつたが何も話す事無く俺は受付へ向かつた。

「すいません。佐々原なんですが、坂倉 美夜さんと面会したいのですが」

「誠に申し訳ないのですが坂倉さんは現在…」

「どうしても会いたいんです。お願ひしますー」

俺は一礼をした。

「分かりました。ご本人と連絡してみます。少々お待ちください」
受付の人は席を立ち、病棟へ行つた。

俺は長椅子に座る。

数分後。

「藤木様」

看護婦さんが帰つてきた。

「特別に3分だけ面会を許可します。着いて来て下さい」

「は、はい」

俺は立ち、後を着いていく。

廊下を暫く歩いていると、

「こちらが坂倉さんの部屋です」

「あれ？ 2階から移動したんですか？」

「はい、今日退院の予定だったもんですから」

「そうだったんですね」

「では面会を始めますよ」

ガラガラ

中に入ると、坂倉さんが酸素マスクをしていた。

「坂倉さん」

「ふ、藤木君」

「ごめん、連絡無しにこんな朝早く来ちゃつて」

「いいよ。でもどうして…」

「実はさ、坂倉さんにどうしても言いたい事があるんだ」

「な…何?」

「実はわ…俺…ずっと

」

俺は一呼吸をし、そして、

「好きでした!」

「えつ」

坂倉さんは急に赤くなつた。

「ごめん急に。でもこれだけは伝えたかつたんだ。何日か前に行こうとしたんだけど手術直後だから迷惑かなつて。今日も迷つたんだ。でも…なんかもう会う^{チャンス}機会ないかなあつて思つて…もう…面会が出来なくなつちやうのかなつ思つて。だから…」

俺は全ての事を伝えようとすると、なかなかその先が言えない。ヤバイ頭が段々真つ白になつてきた。

「だから!退院したら一緒に色々な所を巡つたりしたい。だ、だから…つ、付き合つてください!」

俺は坂倉さんに伝えた。

「…」

暫く間が空ぐ。そして坂倉さんが口を開ける。

「あ、ありがと。でもあたし達は無理だよ。だってあたし余命一週間なんだよ

「え?」

坂倉さんの言葉に衝撃を受けた。

「前に両親に言われたの。だから…無理だよ

坂倉さんは涙を流す。

「そんな、そんな事はないよ。例え余命一週間だらうと生きる道を捨てちゃいけないよ！一日でも、一分一秒長く生き残れるような心を持たなきゃ」

「無理だよ…あたしはあとまつあべでこの世からになくなるんだよ。まずあと一週間じゃ……」

「バカ！」

俺は叫んだ。

「え？」

「何弱気になつてんだよ！わりいが今の坂倉さんは俺のタイプじゃねえ。俺、こんな人を好きになつてたのかよ。なんか損したぜ。俺はもつと心の強い坂倉さんが好きだつたよ！」

俺はそう言つて部屋を去ろうとする。

「藤木君！」

坂倉さんの声に俺はドアノブを触つた状態で止まつた。

「坂倉さん…俺、待つてるから。ぜつてえ死ぬんじやねえぞ」

ガラガラ

俺は部屋を出て、走つていった。

「藤木さん！」

待つっていた看護婦さんが呼び止める。

「すいません。俺帰ります」

俺は再び走つた。

クソ…涙が出ちまうそうだ。

俺は拭いながら病院を出て、自転車に乗り、漕いだ。

「ひーーす」

「よお藤樹。あれ、おまえ田どうした？」

「ちょっと朝から痛くてな。別に問題ねえから

「ら

俺は席に着く。

「そうか。藤樹～これ読むか？」

志原が月刊誌を見せる。

「おう、貸してくれ」

俺は席を立ち、雑誌を借りる。表紙を見ると新連載の絵が載っていた。

「新連載！自宅警備員から医師になる…か。ちょっと読んでみつか新連載のページを読む。

物語は主人公、小池 健一は大学受験に失敗し、引き籠り（この人達の事を自宅警備員という）。そんな彼には好きな人がいる。しかし彼女はある日謎の病にかかりてしまう。その事を知り、彼は彼女の病気を治す為、医師の道へと進むという物語。

読んでいくうちに何だか今の自分に近いような気がして来た。

俺も医師になつて坂倉さんが病気を起こす度に傍にいてすぐ治せるような人になりたい。でも医師つて難しいしなあ。

読み終わり、俺はそんなことを思った。

その頃、病院。

美夜はあれから微動だにせず天井を見ていた。

藤樹君に…藤樹君に振られちゃった。

あたしどうしよう…そんな事を思つていると涙がまた出でくる。

あたし…もう会えずに死んじやうのかな…

その時、頭にあの（・・）言葉が過ぎる。

「バカ！」

「何弱気になつてんだよ！わりいが今の坂倉さんは俺のタイプじゃねえ。俺、こんな人を好きになつてたのかよ。なんか損したぜ。俺はもつと心が強かつた坂倉さんが好きだったよ！」

そうだ…藤樹君の為に…そしてお父さんお母さんの為に、少しで

も長く生きなきや。こんな病気なんかに負けてられない！絶対退院して藤樹君に二つの

好きだつて。

美夜は涙を拭いて誓つた。

あれから一週間後。自宅に専門学校から通知が届いた。

俺は中身を取り出すと…

「藤樹 後様。合格」

やつたああああああ！！！

俺は喜んだ。

しかしあまり素直には喜べない…何故なら前回の面会で俺は坂倉さんを傷つけるような言葉を言ったから。あれから俺は謝りに行こうと何度も病院に行つて面会の申請をしたり、メールを送つた。しかし面会は断念られ、メールは返つてこない。

「坂倉さん大丈夫かなあ」

俺は段々心配になつてきた。

更にあれから一週間後、昼休み。

「尾淵ですが」

「尾淵先生ですか？私坂倉美夜の母です」

「お母様ですか。坂倉さんの体長はどうですか」

「実は…美夜は今朝亡くなりました」

カラソカラソ

掴んでいた箸が落ちる。

「ほ、本当ですか…」

「はい、本日午前5時38分に

「そうですか」

「なので先生、この件に関して先生から生徒の皆さんにしきりお伝え

下さい」

「分かりました」

ガチャ

H.R.

「じゃあ明後日までには提出な
皆はわいわいしていた。

「…つたく」

先生はやれやれというような顔をしていた。

「よし、じゃあ最後にだ…皆、よく聞いてくれ」

突然先生は深刻な顔になつた。

それに応えるかのように皆静かになつた。一体何が話されるんだ
ろ？…

「皆に…皆に大事なお知らせがあります」

先生は躊躇いながらも言つ。

「え…、病気を闘っている坂倉 美夜さん…今朝

「亡くなりました」

「…え！？」

クラス全員が驚いた。勿論俺も驚いた。

嘘だ…。坂倉さんが…坂倉さんが…亡くなるなんて…。

俺は心の中で何度も何度もそう叫んだ。

「昼休みに坂倉さんのお母さんから電話で伝えてくれました。皆、突然の事で申し訳ないのだが、坂倉さんは長い間病気と闘っていた。一刻も早い退院を私たちは望んでいましたが、坂倉さんは残念ながらあの世へ逝ってしまいました。皆さんで坂倉さんへのご冥福をお祈りをしましょう……それでは今日のホームルームを終わります」

先生は教室を去った。

本来なら皆ワクワクはしゃいでる筈なのに今日は皆席から立とうとしなかつた。やつと一人目が立つたのは終わってから10分後だった。

徐々にクラスメートは教室を去る。

「藤樹、俺帰るわ」

「お、おう……じゃあな」

志原は席を立ち、荷物を背負つて帰る。

30分後、職員室。

「すみません」

お母さんが突如入ってきた。

「どちらさまですか？」

「私、美夜の母親何ですが。尾淵先生を」「尾淵先生！」

「はい」

声に反応して、尾淵先生がきた。

「美夜さんのお母様」「

「突然で申し訳ありません」

「いえいえ、こちらこそ」

「あの～美夜からですね、これを藤樹君に届けて欲しいんですが」
一通の手紙が渡された。

「藤樹に…ですか？」

「はい。では宜しくお願ひします」

そう言つて美夜のお母さんは帰つていった。

数分後。教室には俺だけになつた。

外は綺麗な夕日が眩しく照らしていた。

「あつ」

先生が教室を見る。

「藤樹」

「は、はい」

「ちよつと職員室に来い」

俺は席を立ち、職員室へ行く。

「藤樹、坂倉のお母さんからおまえに手紙を渡してくれと言つて來たぞ」

「手紙ですか？」

「そうだ。家に帰つてしつかり読んでおけ

「わ、分かりました」

俺は職員室を出る。

一体何だらう。そんなことを気にしながら俺はカバンの中に入れた。

「ただいま」

「おかえり」

何時ものように帰宅し、俺は一階の自室に入る。

そして手紙を取り出し、中身を見ると一枚の紙が入っていた。

「坂倉さんだ！」

何十行も書いてある文字の下には「坂倉 美夜」と書いてあった。

「藤樹くんへ。

先日はお見舞に来てくれてありがとう。とても嬉しかったよ。

前のお見舞の時に佐々原くんは私に「バカ！」とか「何弱気になつてんだよ！」とか「俺はもつと心の強い坂倉さんが好きだつたよ！」

とか言つてくれたよね。私の時、嬉しかつた。あの時言つてくれなかつたら私ずっと元気が無くて、ただ詰まらない余命生活を送つてたかもしれない。けど佐々原くんが言つてくれたおかげで、生きる事の大切さを知つた。早く治して、早く退院して佐々原くんと一緒にデートがしたい。今も私は病氣と闘つています。けど頑張ります！一日も早く佐々原くんに会うために（* ^_^ *）

またお見舞来て下さいね。 坂倉 美夜

「坂倉さん、坂倉さん…」

俺は涙を流した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8187r/>

二人の間に潜む魔物

2011年9月6日03時16分発行